

中国

派遣期間 2013年4月～2016年3月

天津日本人学校 帰国報告

伊達市立伊達小学校
教諭 寺沢 圭司

I 中国・天津市について

天津市は、中華人民共和国に位置する直轄市の1つである。なお、中華人民共和国には4つの直轄市がある（北京、上海、重慶、天津）。天津市の広さは11,760km²で、日本で言えば秋田県の広さに相当する。

天津市は海に面し、隋の時代には北京から杭州までを結ぶ大運河が築かれ、古くから海運の要衝として栄えている。私が住んでいた天津市内は渤海から1時間の距離に位置し、郊外に行けば畑が広がっているので、「港町」という雰囲気よりは「農村の町」と言える。しかし、1516万人が住んでいる（2014年統計）天津市は、日本に比べると大都市と言える。

天津に住んでいて感じたことの1つ目は、乾燥した街ということである。雨量が日本に比べると少なく、夏でも平均雨量が100mm程度、冬に限っては雨量がほとんどない。若干の雪が降る天津では、車はすべて夏タイヤで走っている。もし雪が降った場合は、道路一面に塩水を散布して雪を一気に融かしている。また、乾燥が激しいので、スキンケアセットは必需品である。夏になると、2Lのペットボトルを持ちながら歩く人々を見かけることがある。春になれば、ゴビ砂漠から黄砂が舞い、街じゅうが白っぽくなる。

住んでいて感じたことの2つ目は、1年の気温差が激しいことである。5月から10月まで平均気温が20度を上回り、時に40度近くまで上昇する。北海道の感覚ならば、20度を過ぎれば夏服で過ごすのが、天津の人にとっては30度過ぎたあたりで夏服に衣替えをする。冬は平均気温が0度前後で、北海道のように厚手のジャンパーを着ることはあまりない。しかし、防寒に対する考え方が厳しく、少しでも肌を見せる子どもがいれば

その親が怒られるほどである。



II 天津日本人学校の特徴

1 概要

(1) 学校運営の構成

- ① 学校名 天津日本人学校
- ② 学校所在地
中国天津市津南区双港微山南路
28号楼
電話 (0086)022-8882-9752
FAX (0086)022-8882-9750
Eメール jstj@tensinjs.net
- ③ 設立年月日 平成11年4月1日
(補習授業校 平成8年4月6日)
- ④ 設立者 天津日本人会
- ⑤ 運営主体 天津日本人学校運営理事会

(2) 学校経営の基本理念

楽しい学校
安全で信頼できる学校
やりがいのある学校

(3) 教育方針

- 基礎的・基本的な知識技能を身につけ、
思考力・判断力・表現力をはぐくみ、主

体的に学ぶ意欲を養う。

○人間としての在り方を自覚し、人生をより良く生き、社会に貢献しようとする態度を養い、豊かな人間性を育てる。

○基本的な生活習慣の確立と社会背の育成を図り、運動を通じて健康の保持増進や体力の向上に努める努力を養う。

○交流活動に積極的に取り組み、他国の人々を尊重し強調する態度を養うとともに、自国の伝統と文化を尊重する態度を身につけ、真の国際性を養う。

(4) 学校教育目標

確かな学力をもち、
心豊かなたくましく生きる
児童生徒の育成

(5) 目指す学校像

「うるおいのある学校」
—学びを通じて心を豊かに—

(6) 目指す児童生徒像

- ① 自ら考え未来を切り開く子
- ② 感性豊かな心をもつ子
- ③ たくましく頑張りのきく子
- ④ 磨かれた国際感覚をもつ子

(7) 目指す教師像

～新しい時代の義務教育を創造する～
・教育に対する使命感と情熱と向上心をもち、専門的力量をもった教師
・心身共に健康で、児童生徒に親しまれ、保護者に信頼される人間性豊かな教師
・現地理解教育に積極的に取り組む国際性豊かな教師
・児童生徒の心身の変化に気づき、成長を一緒に喜びあえる教師

小6	15	総計	175
----	----	----	-----

(8) 児童生徒数（平成27年4月）

(9) 入学金・授業料

○入学金 7000円

○授業料 月3000円、年36000円

(10) 健康管理

○定期健康診断（内科、歯科、眼科、耳鼻科）を実施

○定期身体測定（身長は学期に1回、体重は2カ月に1回）を実施

○学校傷害保険への加入（保険金は学校負担）

○個人でのキャッシュレス保険等への加入を勧める。

(11) 通学方法

○保護者の管理のもとで通学する。

2 特色ある教育活動

(1) 中国語会話

<ねらい>

中国語に慣れ親しみ、基礎的な語彙や発音の仕方を覚え、授業や実生活で中国語を聞き取ったり、話してみたりしようとする態度を育てる。中国語を話す楽しさ、それを使って交流する喜びを感じさせる。

○週1回、年間35回実施。

○中国語教師2名と中国語担当教員1名で授業を展開。

○小学部は全学年同じ内容の授業を実施

○中学部は小学部の授業内容とHSKを意識した授業を取り入れる。

(2) 英会話活動

<ねらい>

英語に慣れ親しみ、基礎的な語彙や発音の仕方を覚え、授業や実生活で英語を聞き取ったり、話してみたりしようとする態度を育てる。英語を話す楽しさ、それを使って交流する喜びを感じさせる。

- 週1回、年間35回実施。
- 英会話教師1名と英会話担当教員1名で授業を展開。
- 全学年で実施。
- 学年に応じた内容を授業で実施。

(3) 体験学習

<ねらい>

中国や天津の文化について体験的に学ぶことを通して、異文化に対する興味や理解を深める。

また、グループ活動や調べ学習の進め方についての基礎的・基本的な知識や技能を身につけさせる。

- 9月実施。対象は小3～小6。
- 小3は泥人形製作、小4は剪紙、小5は餃子作り、小6は花文字作成



(4) 現地校交流会

<ねらい>

現地小学校との交流を通して、中国の人々や中国の文化を尊重し、中国の人々と強調しようとする態度を養うとともに、自国の伝統と文化を尊重する態度を身につける。

- 10月実施。対象は小学部全学年。
- 3時間の中で、全体交流・学年交流を実

施する。

- 現地の小学校の子どもたちが日本人学校を訪れる。

(5) インター校交流会 (小学部)

<ねらい>

英会話活動で習得してきた英語によるコミュニケーション技能を実践的に用いることで、英語を使うことの喜びを味わわせ、技能の定着を図り、より高度な技能を身につけようとする意欲を高める。

また、さまざまな国の文化にふれ、交流を深めることにより、幅広い国際感覚を身につけさせる。

- 11月実施。対象は小学部全学年
- 1時間は天津日本人学校企画、もう1時間はインター校企画で展開。
- インター校を訪問して交流会に参加する。



(6) インター校交流会 (中学部)

<ねらい>

様々な国の文化に触れ、交流を深めることにより、幅広い国際感覚を身につける。

普段学習している英語を実践的に用いることで、コミュニケーション技能の向上を図る。

- 10月実施。対象は中学部全学年。
- 和太鼓演奏披露、インター校授業への参加を実施。

(7) お茶会 (中学部)

<ねらい>

日本の代表的な文化の1つである茶道を天津で体験することを通して、伝統的な日本文化のよさを再認識する。

茶道がもつ厳肅な世界に接することを通して、礼儀作法についての理解を深める。

- 12月実施。対象は中学2年生。
- お茶体験。お茶菓子作り。



(8) 宿泊学習 (北京)

<ねらい>

中国伝統文化である武術体験を通して、中国文化の理解を深める。

集団生活や公衆道徳の在り方について体験を積み、友人と信頼関係を築く。

- 9月実施。対象は小学部5年生。
- 少林寺拳法体験、万里の長城へ登頂。
買い物体験 (1人100元限度)。



(9) 小学部修学旅行 (西安)

<ねらい>

中国の自然や文化などに親しむ体験を通して、中国と日本の関わりを理解し、日本の歴史や伝統・文化を大切にしようとする態度を育成する。

集団行動を通して自立心を養い、自主的に集団の規律や秩序を守る態度を育成する。

- 11月実施。対象は小学部6年生。
- 兵馬俑、華清池、城壁などを見学。
城壁で自転車体験。
兵馬俑テラコッタ作り。

(10) 中学部修学旅行 (上海、蘇州)

<ねらい>

中国の文化財や史跡などを訪れ、見聞することにより、各教科や領域における学習を拡充し深化を図る。

規則正しい集団生活を通して、自ら健康や安全に留意し、きまりや公衆道徳を守ろうとする態度を身に付ける。

- 5月実施。対象は中学部2年生。
- 上海豫園、蘇州虎丘などの史跡を見学。

III 異文化不適應への対処

及び日本文化を通じた交流

1 「天津タイム」の立ち上げ

<きっかけ>

- ・委員会活動や行事に伴う特別委員会の設置、学級活動などで児童生徒(とりわけ小学部高学年と中学部)のゆとりの時間が確保されず、不満が噴き出していた。

※休み時間すべてに活動が入ることによる不満がとて多かった。

<方策>

- ・月・木曜日に天津タイムを設定。
- ・その時間の清掃活動はしない。
- ・その時間の前半は委員会活動を設け、後半は何も活動を入れない。

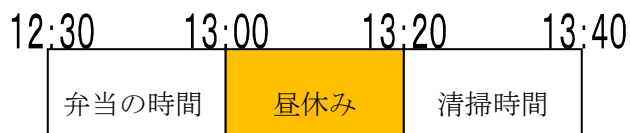
<取り入れた効果>

- ・全学年においてこの時間を設けたことで、小学部低学年は40分全てが休み時間となり、運動不足になりがちな児童に

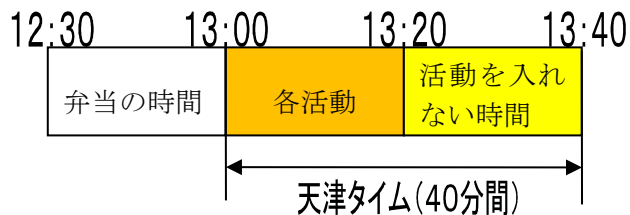
とって、体を動かす良い機会と なった。

- ・小学部高学年と中学部は天津タイム内の活動となったことで、通常の昼休みが確保された。このことで、学級内での交流が行われ、和やかな雰囲気となっていた。
- ・清掃が無い日が週2回となったため、廊下等でほこりがたまるようになった。委員会による啓発活動で、児童生徒の美化意識を高めることにより、改善されてきた。

※火・水・金の昼の時間



※月・木の昼の時間



2 現地中学校での「陸上教室」

<きっかけ>

- ・中国の中学校では「けがをさせないように」「とにかく体を動かす」ことに重きをおいているため、体育の授業が煩わしい、苦手という生徒が多い。また、肥満傾向がある生徒も日本に比べて多く、運動に対する意識も低い。
- ・現地校訪問を機に、陸上教室を開かせてもらい、生徒たちが走る技を知るとともに、生徒たちに走る楽しさを味わわせたいと思った。

<実践>

- ・中国語通訳の職員や体育科の教員と連

携をとって、教室を開いた。

- ・虎のように足を巻き込むなど、比喻を交えながら教えることで、わかりやすく走り方を伝えることができた。
- ・生徒と一緒に走ることにより、生徒との距離も縮まり、生徒から笑顔が絶えなかった。
- ・競走などのゲームを取り入れることにより、生徒は体を動かす喜びを味わうことができた。



3 安全教育

<きっかけ>

- ・日中関係の悪化によって、私が赴任する前では反日デモや鉄球事件が起きていた。そのため、危機管理については慎重に行われていた。しかし、日中関係が改善するにつれて、学校の危機意識、とりわけ子どもの危機意識が薄れていることに危惧していた。
- ・学校でも公寓でも日本人社会の中で生活し、どの人も顔を覚えられる状態ということもあり、安心して生活できる。しかし、馴れ合いも生じてしまい、あいさつを欠いてしまったり、礼儀も軽視されたり、きまりがおろそかになってしまったりするところがあった。

<実践>

- ・避難訓練を3度行い、危機意識の向上を図った。また、不審者の侵入を想定し、バ

リケードをすぐに作れるように練習を行った。

- ・放送がなったら動きを止めて静かに聞く習慣を身につけるとともに、子どもへの連絡は校内放送を限りなく使用せずに担任からの報告やインターフォンでの伝言を行うようにした。
- ・職員の危機意識を高めるために、職員間で集団下校の練習を行ったり、警備会社の職員を講師に招き、さすまた等の護身法を学んだりする機会を作った。
- ・登校時には安全確保のために職員が玄関の前に立ち、子どもたちのあいさつ指導もここで行った。下校時には、全員が体育館に集まり、外で騒がずに静かに車に乗り込むように呼びかけたり、PM2.5用マスクの着用を呼びかけたりした。
- ・日中関係で懸念される日には先生方に安全を確保するように呼びかけ、登校時の玄関前に立つ教員を増員したり、場合によっては教室のカーテンを閉めたりすることをお願いした。

<取り入れた効果>

- ・話を聞くことやあいさつを自発的に行うこと、きまりを守ることなど落ち着いた学校生活にしようという意識が子どもに根付き、学校における危機意識の高まりを見せた。
- ・放送が入ったら大事な話があるという意識が芽生え、静かに聞く子どもたちが増えた。

(4) 現地素材を生かした授業づくりと研究の立ち上げ

<きっかけ>

- ・近年の研究は、「思考力・判断力・表現力」を養わせるといった、日本でもできる実践であった。確かに、これらの力は必要であり、しかも十分に備わる力をもっているとは言えなかった。

- ・しかし、帰国子女の傾向として、在外教育施設にいたこと、とりわけ中国にいたことを隠す傾向がある。また、中国にしながら中国の生活をよく知らないまま帰国してしまう子や、中国人を親に持つことに対してコンプレックスを抱える子がいるなど、海外にいる良さをプラスにできずにいるところが実態として見られた。
- ・そこで、これまでの研究に加え、行事を通して異文化に触れることを継続し活用するとともに、日ごろの授業実践で現地素材をできるだけ取り入れる研究を立ち上げた。

<実践例>

①愛新覚羅溥儀氏のゆかりのアサガオ

小学校1年生の生活科にアサガオの観察がある。校長から溥儀氏の奥様が育てていた種を育ててみないかという提案から、この学習が実現した。夏になり、両方の花を咲かすことに成功した。担当したクラスには親が中国人という子が多く存在し、日本と中国の花が並んで咲くところに感動するとともに、中国の花の美しさにふれ「中国もいいな」と思わせることもできた。この種を来年の1年生につなげることで、日中の交流をアサガオからできるようになった。



②天津における日本のODA事業

天津のみならず中国はまだインフ

ラが十分に整備されていない。急速な人口増加と都市発展は環境を悪化させた。2001年3月に、日本政府はODAとして約71億円を天津の下水処理施設建設のためにあてた。

ODAについては、小学6年生と中学校の社会科で取り扱う内容である。環境問題は身近な問題であるため、日本が中国に対して行動をしていることに驚く子どもも多かった。また、日本の国際貢献を目の当たりにすることで、日本人のアイデンティティを構築するきっかけの1つとなった。

③節分と春節

日本では節分に豆をまくが、中国では春節の前日に爆竹を鳴らす。この風習は実は考え方が一緒である。すなわち、冬を「命を生まない悪」ととらえ、冬の最後の日に「悪」を音やもので追い出し春を迎えるという点である。春節は爆竹で爆音がとどろき、ひどい大気汚染を引き起こすが、文化の違いから同じものを探し、それらをつなぎ合わせることで世界を身近なものにさせる。これらを道徳や学活で活用し、自分の中の「悪」について考える授業を行った。

<取り入れた効果>

- ・親が中国人という子どもにとって、中国のことを授業に取り上げることで、中国文化の良さにふれる機会を作り、中国をもっと好きになろうという気持ちが芽生えてきた。
- ・現地素材を取り入れた授業づくりを教員も意識するようになり、中国人スタッフも交えた教材づくりができるようになった。
- ・学校の外へ出て、活用できる素材を探す動きも出始めている。この研究を継続し、現地素材を活用した授業を引き継ぐ体制ができた。

IV 暮らしを多面的に見てみよう！

<食べ物>

天津で有名な食べ物といえば、狗不理包子（ゴウ・ブ・リ・バオ・ズ）である。これは、天津に観光に来た人ならば、ぜひ食べたい肉まんであり、お土産で持ち帰る人をよく見かける。

基本的に、天津の食べ物は路上や小さなお店で安く購入できる。前餅果子（チエン・ビン・グオ・ズ）は、ネギを入れ、卵を薄く焼き、揚げパンか揚げ餅を中に入れ、味噌をつけて食べるものである。大餅鸡蛋（ダー・ビン・ジー・ダン）は小麦を伸ばしたパンの中に、野菜や肉、辛い味噌を加えたものである。おやつとしては、耳朵眼炸糕（アル・ドゥオ・ヤン・ジャ・ガオ）という揚げ餅がある。観光地でよく見かけるが、昔からよく食べられたものである。天津といえば天津甘栗であるが、ここでは小宝栗子（シャオ・バオ・リー・ズ）と呼んでいる。10月ぐらいに新栗が始め、ほくほくとした焼き栗を食べることができる。おかしのお土産として、麻花（マー・ファー）がある。油で揚げたサクサクとした、かりんとうのようなものである。



前餅果子



大餅鸡蛋



耳朵眼炸糕



小宝栗子

<乗り物>

天津市内を移動する場合は、公共機関を利用する。その際に、城市卡（チュアン・シー・カー）を購入すると大変便利である。このカードは50円で購入でき、公交车（ゴン・ジャオ・チュア）

や出租车（チュー・ズー・チュア）、地铁（ディー・ティエ）に乗ることができる。公交车や地铁は、距離に関わらず1回約2元、出租车は初乗り9元である。また、天津と北京の間に高铁（ガオ・ティエ）が走り、片道54元を払えば30分で到着する。さらには、地铁は天津空港までつながっているの、空へのアクセスも万全である。



公交车



出租车

<買い物>

天津は野菜や果物を大変安く購入できる。食べ物の新鮮さを求めるのであれば菜市场（ツァイ・シー・チャアン）、日用雑貨などを購入したいのであれば华润万家（ファ・ルン・ワン・ジャ）や永旺梦乐城（ヨン・ワン・モン・ルー・チュワン）などの超市（チャオ・シー）、ショッピングやグルメを楽しむなら恒隆广场（ハン・ロン・ガン・チャアン）などのショッピング広場へ行く。近年は日本商品が比較的安く購入できるようになり、食生活に不自由することが無くなってきている。菜市场など対面で値段交渉する買い物は今も残っており、現地の人とのコミュニケーションを図る楽しさを実感することができる。



永旺梦乐城



恒隆广场

<天津市の大気汚染と対策>

2014年4月の中国全国人民代表大会で「中国環境保護法の改正」が可決され、大気汚染の対策を含め、環境の保護と改善に本腰を入れることになった。天津市においても環状道路内のナンバー規制で交通量を削減し、さらに緑化の推進にも重点的に取り組んでいる。国をあげて

環境対策に本腰を入れようとしている。2014年11月の北京で開催されたAPECの期間は、交通規制はもちろん企業、学校を休みにし、APECブルーの青空にして見せた。

<天津にある日系企業と在留邦人>

天津にある日系企業数は3000社程度、在留邦人は4500人前後いるとされている。在留邦人の多くは日系企業の家族である。

日系企業としては、トヨタ、電装、アイシン精機などの自動車産業、松下、キャノンなどの電子情報産業、武田薬品、大塚、ロートなどの医薬品産業、東芝など製造メーカーと丸紅、三井物産など大手商社、東京三菱UFJ銀行や三井住友銀行といった大手銀行など、多種多様の企業が存在する。また、イオンやセブンイレブン、ユニクロなどの小売業、吉野家やサイゼリアなどの日本の飲食業界、または日本人料理人が監修・調理する日本料理店も数多く出店している。

<天津にある日本製品>

中国国内には、日系企業が生産した食料品や雑貨が数多くある。また、日本から輸入した商品もある。

価格は、中国で生産した商品の方が安いのは当然であるが、食料品に関しては日本と同様の味とはいかない。特に、カレールーに関しては、中国人の嗜好に合わせた味付けになっているので、日本人にとっては違和感がある。また、ヤクルトは日本のものと比べてサイズが大きくなっていて、味が薄い。これは、たくさん摂取したいという中国人の国民性からきている。

日本から輸入した製品は、日本で生産されたものなので安心感をもつ。しかし、値段が相当高くなってしまふ。これらを買えば家計に影響を与えるので、どこかで妥協する必要がある。

【おわりに】

○3年間の学校生活

1年目は5年生の担任だった。小学校からの赴任であったので、小学生の担任には違和感が

なかったのだが、中学生の社会科も全学年担当することになったため、5年生の教室では国語と総合的な学習の時間、学活、道徳しか入ることができなかった。今までは、全教科を通して学級経営をしてきたので、子どもたちと授業で人間関係をつくる難しさを感じた。また、教科担任制という利点を生かし、様々な先生で学級を育てる良さにも気づき、スタンドプレーが多かった自分の教師像を見つめ直す良いきっかけにもなった。

2年目は中学2年生の担任だった。当初は中学生との接し方に迷いがあった。どこまで生徒の中に入っていけばよいのか、生徒に響く話し方はどうやればよいのか、中学校の生徒指導はどういったところを大切にすればよいのか、進路学習はどうやればよいのかなど、やることすべてが新しい試みであった。特に、中3を経験せずインター校へ進学する子への進路指導が悩みどころであった。そういった中でも、経験豊かな先生方の支えによって何とか乗り切った。この1年、自分が2年生に何ができたのかが不安だったが、彼らが3年生になった時に、感謝の言葉を添えたプリンをもってきてくれた時に目頭が熱くなった。

3年目は小学1年生の担任だった。中学部から小学部への異動だったので、「せんせい」と親しげに寄ってくる子どもたちが愛らしかった。いつもの小学校と違うのはクラスの半数近くが中国人を親に持つ子であった。日本語があまり理解できずただ泣く子や、中国人スタッフのところへ行っ心休める子もいたが、2年間で培った中国語を使いながらコミュニケーションを図り、入学から数か月経った頃には先生と児童の関係づくりが出来上がった。

○感謝のことば

この3年間は何事にも変えがたい貴重な時間であった。しかも、その時間は決してひとりでは成しえないものである。

赴任までそして赴任以降も支えてくれた天津日本人学校の教職員と中国人スタッフの皆さん。中国の生活を楽しくさせてくれたアパートの職

員、中国語の先生、運転手さん。中国に暮らす同士として親しくしてくれた子どもたちや保護者、同じアパートに過ごす日本人。赴任に至るまで応援してくれた前任の教職員の皆さんと、胆振国際教育研究会の皆さんや今まで関わってくれた先生方。自分のわがままについてきてくれた奥さんと子どもたち。中国行きを見守ってくれた両親。…「真的非常感謝！」

そういった人たちのために、この経験を生かして力を使っていきたい。そして、中国は大切な隣人であるということを、会う人に伝えていきたい。